

もう誰も恨みません

泉区支部 金松 美恵(子)

戦没者 櫛原 祥太郎

戦没地 トラック島

昭和十八年四月二日、私が三歳の誕生日に、父の戦死の公報がはいりました。妹が生まれて十七日目、兄は七歳。母は父の死を覚悟していたようですが、どんなにか狼狽し嘆き悲しんだことでしょう。母のお腹に妹がいた時から、戦闘機の製図に追われて残業に明け暮れ、生まれて来るとの智恵を使い果たし、栄養も充分にとれず、妹は未熟児で生まれて来ました。顔がたばこの箱で隠れ、手のひらに乗ったくらいでした。お乳も出ず、祖母が僅かなお米を手に入れ、播り鉢ですってその汁を飲ませて何とか育てたようです。その為、知能が弱く背が低く小さいです。

父はまだ見ぬ嬰兒と愛する妻、愛しい我が子を残して行くのに、どんなにか無念で辛く心残りだったのでしょうか。母の一生も可哀想で、私はこうして書いていても胸が痛み泣けてくるのです。

母は初恋の人を追いかけて満州まで渡り、親に反対され引き戻され親が決めた人、父と一緒にあったのです。幸せな時は束の間で、一瞬にして砕かれどんなにか戦争を恨んだことでしょうか。貧乏のどん底で食べる物も着る物もなく、母は嘆いたすえ一家心中を図るつもりでした。祖母の

一言「死ぬならあんた一人で死になさい。私は孫達を守る」 母は思い止まったのです。

父の戦死で一時金が下ったそうですが、郵便局長が握ったきり貯金させられ、あの当時、千円で百坪の土地が買え、二階家が建ち井戸まで付いたそうです。母が死ぬ昭和五十年まで一年に二百円、下駄一足も買えないと恨んでいました。配給物もままならず、町内会長が上前をはね、その上組長までがはね、手元に來たのはほんの僅かでした。「戦争が人間の心を狂わせてしまう。」と母はよく言っていました。無理がたたって、母は結核を患い心筋梗塞で逝ってしまいました。今、私や妹が母の歳を超えて生かされておりますのは、亡き父、母、祖母が見守ってくれるお陰と思えてなりません。あの戦争の悲惨さ、辛さを乗り越えて來ましたから、今の幸せがあり人並みの生活が出来る有難さに感謝して、せっせとお墓のお守りをしております。

毎年一回靖国神社に参拝させていただき、父に涙して詫びながら手を合わせお参りしています。不憫な妹を一生守っていくのは、姉の務めです。

もう誰も恨むことはできません。あるがままに受け入れて來ましたから。

兄が五十八歳で逝き、特別弔慰金四万円は、兄嫁と妹と私の三人で分けて、大切にに使わせていただいております。

今やたらと人を殺し、命を粗末に散らすなんて勿体なくて涙がこぼれます。無念の死をとげた戦没者達の怒りと、悲痛の叫びの声が聞こえてきそうです。

残りの人生、世の為人の為に尽くしてまいります。

戦争反対と唱えることが出来る自由で平和な世の中ほど、尊いものはないのです。